

建長寺道隆への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

夫ぶつかくのき仏閣軒を並べ法門屋いえごとに拒いたる。仏法の繁栄は身毒けんどく・尸那しなにも超過し、僧宝ぎょうぎの形儀は六通の羅漢の如し。然りと雖いえども一代諸経に於て未だ勝劣浅深を知らず。併しかしながら禽獸きんじゅうに同じ、忽たちまちに三徳の釈迦如来を抛なげうちて他方の仏菩薩を信ず。是豈ぎやくるかやだ逆路伽耶陀の者に非ずや。念仏は無間地獄むけんの業、禅宗は天魔の所為、真言は亡国の悪法、律宗は国賊の妄説と云云。

爰ここに日蓮去ぬる文応元年ころの比、勘へたるの書を立正安国論と名づけ、宿屋入道を以て故最明寺殿に奉りぬ。此の書の所詮は、念仏・真言・禅・律等の悪法を信ずる故に、天下に災難しき頻りに起こり、剩あまつさへ他国より此の国を責めらるべきの由之を勘へたり。然るに去ぬる正月十八日牒状到来すと。日蓮が勘へたる所に之少しも違はず普合せしむ。

諸寺諸山の祈禱の威力滅する故か。將はたまた又悪法の故成るか。鎌倉中の上下万人、道隆聖人をば仏の如く之を仰ぎ良観聖人をば羅漢の如く之を尊む。其の外寿福寺・多宝寺・浄光明寺・長樂寺・大仏殿の長老等は「我慢心がまんしんじゅうまん充滿みとくい、未得謂為得いとく」の増上慢の大悪人なり。何ぞ蒙古国の大兵を調伏じょうぶくせしむべけんや。剩へ日本国中の上下万人悉く生け取りと成るべし。今生には国を亡ぼし、後生ごしょうには必ず無間に墮せん。日蓮が申す事を御用ひなくんば後悔之有るべし。此の趣きを鎌倉殿・宿屋入道殿・平左衛門尉へいのさえもんのじょう殿等へ之を進状せしめ候。一処に寄り集まりて御評議有るべし。敢へて日蓮が私曲あしきよくの義に非ず。只ただ経論の文に之を任す処なり。具つぶさには紙面に載せ難し。併しかしながら対決の時を期す。書は言を尽くさず。言は心を尽くさず。恐々謹言。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮花押

進上 建長寺道隆聖人侍者御中